

書写力向上をめざして

—基礎・基本とその応用—【第26回】

「書写の要素」について ㊦ 〈字形(9)〉

山梨大学大学院教育学研究科教授

宮澤 鷺州

先月号では「横画^{かく}とその他の画との交わり方」を取り上げました。今月号では先月号の続きとして「縦画とその他の画との交わり方」をはじめ、さまざまな交わり方のパターンを取り上げます。



字形の整え方(八)

先月号に引き続き、「点画の交わり方」のパターンの見ていきましよう。

(3) 点画の交わり方の種類 〈その2〉

① 縦画に他の画が交わる例

ア 縦画+横画

縦画に横画が交わるパターンは、「王・田・馬・

角」などのように、先に書かれた横画(部)に縦画が接したり、「里・重」などのように、縦画が「日」部を貫いた後に横画が交わったりする場合に多く出現します。「座」の「土」部は、筆順が「縦↓横↓横」なので、特例のパターンと言えるでしょう。

イ 縦画+左払い

縦画に左払いが交わるパターンです。この例は意外に少なく、「才」を持つ漢字に見られます。

「才」は、川の流れをせき止める堰^{せき}の象形^{しょうけい}「𠂔・十」で、字源からすれば三画目の左払いは縦画にしっかり交わってしかるべき字体と捉えられます。ただし、教科書体のデザインではほんのわずかしか出ていないので「交わるのか、接するのか」といったことが問題になるようです。全く由来を異にする片仮名の「オ」(「於」の方の異体「オ」

王里馬座



を字源とする」とと区別化する意味においても、漢字の「才」は、はっきりと交わる書き方にすべきだと考えます。

さらに、「弟・閉」のように、狭い空間に左払いが位置づけられる場合は、その接・交関係は微妙になります。特に「弟」は杭にひもを巻き付ける象形「弟・弟」で、「才」とは異なる字源ではありますが、やはり左払いに相当する部分は縦画に交わるのが本来の形ですが、古くから「弟」の左払いは交わずに接したり離したりして書かれることもあることから、厄介な部分として扱われています。教科書体では微妙に始筆部分が外に出ており、字源に即したデザインが施されています。

これらの漢字の書き方としては、左払いの始筆部分が少し出ること意識して書くことで対応するのがベターであると言えるでしょう。

才材閉弟

ウ 縦画+折れ

縦画に折れの画が交わるパターンです。「出」の一・二画目の交わり、「飛」の四・七画目の交わりを例として挙げる事ができます。いずれも

折れの横画部が縦画に交わるので、前述した「縦画+横画」と同様に考えることができます。

出飛

エ 縦画+右上払い

縦画に右上払いが交わるパターンです。手偏「扌」、牛偏「牛」などに見られます。この場合、「手」「牛」が偏になり、しかも筆順が変化して、それぞれの最終画が右上払いへと変化したものです。単独形が偏になった場合、「最後に書かれる横画は右上払いに変化する」といった原則に即しています。右上への払いは、縦画と交わった部分あたりから筆圧を減じて払います。したがって、右上払いの右端約三分の一から四分の一の長さが払いの部分として右外に出ます。なお、払いの方向は、旁部の一画目の始筆に向かうと、偏と旁が密接に組み立てられることとなります。

打物

②左払いに他の画が交わる例

左払いに交わる画は、多種多様です。

ア 左払い+横画

「ナ」の形を持つ「右・有・布」などが代表字例となります。「ナ」は「又(右手の形)」の変形であり、現在でもその古形の筆順が踏襲されて、「左払い+横画」の順で書かれます。左払いは、ほぼ中心から書き始め、約45度の角度で送筆し、横画は字形の最大幅になる長さであることを意識しつつ、左払いを約一対二に分割するあたりで交わるように書きます。

その他、「女」の二画目と三画目の交わりもこのパターンになります。この交わる部分も微妙ですが、かつては、左払いの始筆は横画と接するパターンが指導されていました。しかし、教科書体による字体が示されて以降、この部分は「左払いを少し出す」といった表現で指導されることが多くなり、微妙ながらわずかに交わると認識されています。ただし、かつての接する書き方は「許容」として今も誤りとはしないとしています。そもそも、「女」は女性の姿をかたどった象形であり、「母」字の三・四画目の点を除いたら「女」になることから、「女」の二・三画目はちょっと交わるのではなく、しっかり交わる形が原型に近いと言えます。なお、左払いが短くなる傾向は、「手書きにおける字形は機能性を重視して進化する」とい

う好例と言えるでしょう。

右有布女

イ 左払い＋縦画

これもまた、微妙な交わりのパターンです。

「不」の古い形は「不・不」で花のめしへの子房（花房）の象形とされます。これに従えば、左払いと縦画はしっかり交わる形が字源に近くなります。ただし、前述の「女」の進化と同様、「不」の縦画が短く進化したことでわずかな交わりとなり、場合によっては接するだけといった書き方も許容の範囲とされています。教科書体ではわずかではありますが縦画の始筆が出ているので、意識的に交わる書き方を勧めます。

「在・存」の二・三画目の交わりも微妙です。「在」の字源は「土」と「才」の形声で、「在」の一・三画目の形は「才」の変形です。したがって、「才」と同様、しっかり交わるということができません。「存」は「在」に「子」を加えた形声字であることから、その一・三画目の形は「在」に従うことになり、しっかり交わることになります。三字ともに微妙な部分ではありますが、字源に立ち返ると、しっかり交わるのが理屈に合うよ

うです。字源に立ち返るというベクトルと、点画の簡素化や書きやすさという機能優先のベクトルとの綱引きになります。字源をわずかでも残した形を心得た上で、日常的にはTPOに応じた機能的書き方であっても誤りとはしない、といった鷹揚さ（おうよう）があつてしかるべきだと思います。そもそも書き文字とはそういった宿命を負いつつ展開を見せてきたのですから。

不在存

ウ 左払い＋右払い

左右の払いが交わるパターンで、「父・文」のように、文字の中央で交わる場合は、それぞれ45度の角度を保ちます。交わる位置はそれぞれ、約一対二の割合の部分になります。また、交わる角度は当然のことながらほぼ直角ということになります。また、「改」の旁「父（ほくにょう・ほくつくり）」では、概形が縦長四角になり、左右の払いの角度はそれぞれが45度より高くなるので、交わる角度は直交とはなりません。

「史」の四画目は垂直部の長い左払いです。これに右払いが交わるパターンです。この場合、左払いの垂直部の長さは右払いと交わる部分までと

捉えると、字形を安定させて整えることができます。左払いは先に書かれるので、右払いとどこで交わるかを想定して書くことが大切になります。また、「使・便」など、旁部になっても同様に考えることができます。

父牧史便

エ 左払い＋反り

左払いに反りが交わるパターンです。「必」は二画目の左払いに左回りの反りが交わる例で、左払いの三分の二あたりを目ざして反りを交わらせにすると安定します。角度はほぼ直交することになります。

「狩・独」などのケモノ偏「犛」は、一画目の左払いと二画目の時計回りの反りとが交わります。そもそも、この反りは最初、始筆から45度方向に引いた後に方向を変えて下へと向かうことから、反る前に方向転換としての節（むす）ができます。その節の部分が左払いと交わる位置であり、一つの目安になります。左払いはほぼ等分割される部分で交わります。

必狩



オ 左払い十曲がり

左払いと曲がりの交わりは少ないのですが、意外に左払いの方向が難しいと言えます。左払いに角度が付き過ぎると下部が狭くなるので注意が必要です。この場合の左払いは、下に横画、曲がりの横画部があるので、「千・手」などのように、左払いのすぐ下に横画がくる左払いの方向と同様に捉えます。すなわち、横画とほぼ平行にすることが重要です。

なお、この左払いは横画に変更して書くことが許容されています。

純

カ 左払い十折れ

左払いに折れが交わるパターンです。「九・丸」は左払いに曲がりを含む折れとの交わりです。左払いは約60度の角度で送筆し、折れの横画部と交わる位置は約三分の一あたりでしょうか。また、二画目の横画部の交わる位置は約二分の一あたりを目安にします。

「為」は二画目の左払いと三画目の横画と斜め縦の折れが交わります。左払いは60度の角度で払い、三画目と交わる位置は一对二のあたりになります。三画目の横画部は二対一のあたりで交わります。

丸丸為

キ 左払い十点(長点)

点は、本来短い画の性格を持っていますが、その小ささが故に他の画と交わることはないと思えるべきです。しかし、「丸」の三画目の点や、「氣」の「メ」の二画目の点は、単独の点とは異なり、送筆部を長くする「長点」とも呼ぶべき性格を持っていると言えるでしょう。ここでは、そのような性格の「長点」と左払いとの交わる漢字を集めてみました。

すべてが「メ」の形として抽出できます。二画目の「長点」は、左払いに対してほぼ直交します。左払いは三分の一あたりで、長点はほぼ等分割される位置でそれぞれ交わります。

丸氣対効

ク 左払い十右上払い

左払いに右上払いが交わるパターンを取り上げてみました。「女」が偏になると横画が右上払いに変化します。その際、二画目の左払いの始筆と右上払いとが交わるのですが、微妙な交わりとなります。右上払いは横画より角度が高くなることから、二画目の左払いの始筆が下がると交わりなくなりません。場合によっては離れてしまうこともあります。女偏を書く場合には、二画目と三画目の右上払いが交わることを想定して二画目の上の部分を上から長めに書いておく必要があります。

「船」の二画目の左払いと六画目の右上払いのパターンも取り上げてみました。この場合の左払いは「月」の一画目と同様、垂直部分を長くした左払いです。六画目の左払いは左払いだけでなく、内部の点を避けつつ、さらに三画目の縦画部にも交わることから、水平に近い角度で送筆します。

好船

次回も、「点画の交わり方」のパターンを取り上げます。